文化

始末処」（ポプラ社）を出した。始末処は現在でいえば探偵事務所。19歳の主人公虎彦が、浄瑠璃作家の近松門左衛門らと共に、あだ討ち中に行方不明になった武士を捜すなど依頼の解決に向けて奮闘する筋書きだ。

ささいなもめ事から重傷を負い、近松に助けられて始末処に関わることになった虎彦。軽妙洒脱でサスペンス要素満載の展開は、往年の人気テレビ時代劇「必殺仕事人」シリーズを想起させる。築山さんは「活気

詩集 生命の賛歌に耳傾けて

名古きよえ詩集「命の帆」

1935年生まれのベテラン詩人の最新詩集。孫の誕生を寿祝ぐ作品から、いつしか自分自身が娘を出産した記憶へとテーマは移り、さらにさまざまな出産と子育ての場面が登場する。帝王切開、子宮外妊娠、鉗子分娩…。何世代にもわたって命を育んできた女性たちの顔がそこには重なる。けれども、そうやってやっとのことで生まれ育った命が、作者の幼いころには、兵士として次々と理不尽な死を強いられたのだった。それでも、秋の地虫の鳴き声に、作者は途絶えることのない生命の賛歌を聞き取ろうとする。

以下は「生の祭り」の結び。

〈生の祭りだ
涼しけに鳴いて
命を残している
彼らの声に取り囲まれ
幸せを思うことがいくらかある
か
生の光に　その時間に〉

なご・きよえ。京都市在住（東京都新宿区東五軒町3の10・土曜美術出版販売、2160円）

尚泰二郎詩集「運命の人」

こちらは50年生まれの作者の第10詩集。「おーい括約筋／活躍してくれないと困る」などと駄じゃれめいた言葉を差し挟みながら作品はひょうひょうと展開するかと思うと、意識、時間、記憶を巡って、とびきり思索的な言葉が紡がれていたりする。後半には物語的な散文詩も収められている。つまり、極めて意識的に多彩な作品をちりばめた詩集。

以下は「傘」の冒頭。

〈傘を畳みながら途方に暮れる
僕はもう時間の行方には
どんな関心も抱いていない
たとえこの雨がやんでも
行くところはない
ただ時間が過ぎ去ってゆくのを
ここでじっと待つしかない〉

なお・やすじろう。福岡市在住（福岡市博多区千代3の2の1・梓書院、1080円）

○山本由美子詩集「霧の中のブルー・BLEU BROUILLARD」

最後は、英文学を専攻している作者の約10年ぶりとなる第2詩集。タイトルのアルファベットはフランス語で「青い霧」の意。とはいえ、この詩集を読むのに英語やフランス語の知識は不要。平明な日本語で、伝えたいことにくっきりとした輪郭を与えるところに、作者のすぐれた特徴がある。この詩集には、まるで静謐なオブジェのような「いけばな」の写真も添えられているが、作者の作品自体がまさしくそのような言葉の「いけばな」の印象でもある。

以下は、すべて平仮名でつづられた「みず」の全行。

〈そそぐため
あふれるため
たゆたうため
しみこむため
いやすため〉

やまもと・ゆみこ。姫路市在住（大阪市北区東天満2の9の4千代田ビル東館7階FG・竹林館、1944円）

（細見和之・詩人）